

<b>Title</b>	ソーシャルワークにおけるエビデンス・ベース・プラクティス(EBP)の出現 : 近年のソーシャルワークにおける新たな動向
<b>Author(s)</b>	増田, 公香
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢,21(3) : 273-283
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=910">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=910</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

# ソーシャルワークにおける エビデンス・ベース・プラクティス (EBP) の出現

～ 近年のソーシャルワークにおける新たな動向 ～

増 田 公 香

Appearance of Evidence Based Practice in Social Work

～ New approach in Social Work ～

Kimika MASUDA

EBP, Evidence-Based Practice, appeared in the area of social work at the beginning of 2000. EBP was formally established in medicine in the 1990s, but now exists as a powerful methodology with which integrate science and intervention through social work.

This article has three purposes: 1) to review the history of EBP and the reason for the appearance of EBP in the social work area; second, to examine definitions of EBP and steps for practice; thirdly, to pay attention to the use of EBP in social work education and social practices.

The use of EBP in future social work will also be examined.

---

**Key words:** エビデンス ベース プラクティス (EBP)

## I. はじめに

近年、欧米を中心としたソーシャルワークにおいてエビデンス・ベース・プラクティス (Evidence Based Practice, 以下「EBP」) という新たなアプローチが展開されてきている。EBPは、ソーシャルワークにおいて大きなパラダイム転換であると支持されている。

本論文では、文献研究により下記の点を明らかにする。第一に、近年のソーシャルワークにおけるEBPの歴史的展開について振り返り、なぜソーシャルワークにおいてEBPが導入されたのか、その背景要因について考察する。第二に、現時点で支持されているEBPの定義や方法論の動向を探る。第三に、現状のソーシャルワーク教育におけるEBPやソーシャルワークの実践においてEBPの展開について考察する。第四に、今後の日本において求められる課題について検討する。

## II. EBP の歴史的展開

### (1) EBP の萌芽期

EBP は、その根源は1980～90年代に医学の分野で出現した概念である。それは、伝統的な権威主義に基づいた治療ではなく、科学的根拠に基づきより効果的な治療を実践するための過程として誕生した。

1998年には多領域にわたる学際的ジャーナルとして Evidence-Based Mental Health が創刊された。その編集者である Szatmari は論文の中で、「EBP は、家族と共に情報を共有し、様々な治療方法のリスクや長所について意見交換を図る実践である。…われわれの役割は、家族に十分な情報のもとでの選択肢を提供し、彼らが苦悩しているジレンマに共感することである。」としている。また Gray は EBP の影響力について、「EBP の普及は、医学における予防や治療に関する知識の進歩に貢献し、さらには医療費削減の実現化を図るための効果的な治療を推進する経済的効力にもなった。」(Gray 2001)。そしてその後、EBP は看護や心理学など多くの隣接領域に広まり、ソーシャルワークの領域にも出現してきた。

### (2) EBP のソーシャルワークへの導入期

ソーシャルワークにおける EBP の導入に貢献したのは、少数のソーシャルワーカーや研究者によるものだった。具体的には、Gambrill や Howard, Rosen や Proctor, Thyer 等が挙げられよう。(Gambrill 1999; Howard 2003; Rosen et al.1999; Thyer 2003)

では、なぜソーシャルワークの分野において、EBP が導入されるようになったのだろうか。その背景として次のような動きが考えられる。

1990年代後半に、ソーシャルワーク実践において、より効果的な支援の実現に向けて科学的根拠に基づいたソーシャルワーク実践の必要性を求めた動きや、また当事のソーシャルワークの動向に対する痛烈な批判が出てきた。Howard 等は、ソーシャルワーク実践においてより効果的な支援の実現を図るためにガイドラインの作成の必要性を指摘している。その上で NASW に対し、伝統的ソーシャルワークの価値を踏まえた上で、科学的根拠と経験的实践を連携したガイドラインの作成を提言している (Howard 1999)。

また Gambrill は、「エビデンス・ベース・プラクティス～権威主義に基づく実践の代替～」というタイトルの論文の中で、「(1999年に開催された NASW の理事会で決定された最終指針について) NASW の主張はすべて知識を強調している。しかし、そこには全く“根拠 (evidence)”がない。」とした上で、現状の経験主義に基づいたソーシャルワーク実践のあり方について痛烈に批判している (Gambrill 1999)。さらに Howard 等は、「現在、ソーシャルワーカーは上司や先輩・同僚のアド

バイス、あるいは個人的経験に基づいて実践している。…中略… しかしながら、科学的根拠に基づいた実践は必ず専門性の効果性や信頼性を強化する。」と EBP の重要性を強調している (Howard 2003)。

1990年代半以降、従来の経験主義を重視したソーシャルワークに対する痛烈な批判が生じた。そして科学的根拠に基づいたソーシャルワーク実践の必要性が訴えられるようになった。このような従来の伝統的なソーシャルワークに対する痛烈な批判が、ソーシャルワーク分野への EBP の導入の引き金になったと考えられる。その結果、1990年代後半以降、EBP がソーシャルワークやソーシャルサービスの分野に導入され具現化されてくる。

具体的にソーシャルサービスの分野において最も早く EBP を取り入れたのは、イギリスにおいてであった。1990年代半ば、イギリス政府は Exeter 大学を基盤にして、ソーシャルワーカーであるブライアン・シェルダンを中心にエビデンス・ベース・ソーシャルサービスセンターを築いた。シェルダンは、EBP に関する会議を開催し定期的にセンターの活動をニュースレターとして報告した。また、教育の分野では、アメリカのセントルイスにあるワシントン大学のジョージ・ウオーレン・ブラウン社会福祉大学院 (George Warren Brown School of Social Work, 以下「GWB」) が最も早く EBP を導入した。GWB は、2000年 EBP を修士 (Master of Social Work) プログラムの中に取り入れることを決定した (Thyer 2003; Howard 2003)。

### (3) EBP の展開期

ソーシャルワークのバブル的存在である、アメリカソーシャルワーカー協会 (NASW) が出版している Encyclopedia of Social Work に“Evidence Based Practice”という語彙が初めて出てきたのは、2003年に出版された Encyclopedia of Social Work 19<sup>th</sup> of the Supplement (2003) においてであった。ここでは、「Empirically Based Intervention」の項目の中に記載されており、「EBP は、経験主義的実践の動きとは同方向ではあるが類似しない動きである。」としている (Thyer 2003)。つまり皮肉にも、後に EBP とは相反する方向性として位置づけられるようになる経験主義に基づく実践 (Empirically Based Intervention) の項目に EBP が記述されたのである。また同じく Encyclopedia of Social Work 19<sup>th</sup> of the Supplement (2003) においては、Howard を中心としたワシントン大学の教員らによって“Evidence- Based Practice Guideline”が論じられた (Howard, Bricout, Edmond, 2003)。

そして、2003年を契機に EBP に関する論文等が多くかかれるようになった。

このように見てみると、2003年がソーシャルワークにおいて EBP がその存在を明確にした一つの分岐点となったといえよう。

また2004年には、「Journal of Evidence-Based Social Work」が Haworth Press より創刊され、現在に至っている。

## ソーシャルワークにおけるエビデンス・ベース・プラクティス (EBP) の出現

その後、アメリカにおけるソーシャルワークの学際的学会である SSER (Society for Social Work and Research) やアメリカソーシャルワーク教育学校連盟 CSWE (Council on Social Work Education) が主催する学会等において、EBP に関する発表や会議が急増していった。2004年に CSWE は、EBP はソーシャルワーク教育において重要な原理であることを明らかにした。さらに、2006年にテキサス大学オースティン校で行われたシンポジウムでは、ソーシャルワークのカリキュラムにおいて EBP を教えることの重要性に関して緊急提言が行われた。以降、現在に至るまで EBP に関する多くの論文が見られるようになって来た。

### (4) まとめ

以上、近年のソーシャルワークにおける EBP の萌芽から現在に至る展開過程を振り返ってみた。1990年代半ばから後半にかけて、従来の伝統的ソーシャルワークに対する痛烈な批判を契機に、隣接領域において発展した EBP がソーシャル分野に導入されてきた。その背景要因としては、従来のソーシャルワークにおけるあいまいさの軽減を図り、科学的根拠性に基づきより効果的な支援の実現化を行い、利用者がより明確な自己決定のもとでソーシャルワークを行う必要性が生じてきた結果といえよう。つまり、利用者がよりよい支援を受ける権利の保障の実現化に向けての方法論であるといえる。Cournoyer 等は、「EBP は、マネージドケアやその他様々なソーシャルワークに求められる新たな多くの外圧的要求に対応したものである。」としている。つまりソーシャルワークにおける EBP の出現は、医学領域の単なる模倣ではなく、ソーシャルワークにおいて必要に迫られたニーズのもと展開された動きといえる。そしてそれは、ソーシャルワークにおける大きなターニングポイントであり、パラダイム転換であるのではないかと考える。

## Ⅲ. EBP の定義と方法

### (1) EBP の定義

それでは EBP とは一体何なのか？ 現在、EBP という用語は幅広く用いられている。

その中で、EBP の定義としてソーシャルワークの分野で支持されている項目についてみてみたい。

EBP の定義として最も早く行われたものとしては、1997年に Sackett 等によって明らかにされたものである。そこでは、EBP を「個人のケアの決定を行う際、最も現代的な根拠を入念に明確にかつ思慮的に用いる方法」としている (Sackett, 1997)。また Gambrell も同様の見解を示している。「EBP においては、ソーシャルワーカーは、重要な支援の決定においては支援に関連したリサーチを行い、利用者とそのリサーチ結果を共有する必要がある。」としている。すなわち、経験主義に基づくのではなく、リサーチを行い、その結果を根拠として利用者と共にしながら最も効果的な支援の方向性を決定していくプロセスである、としていると考えられる。

その後、2000年に新たに Sackett 等は次のように定義した。「EBP とは、実践者の専門的判断を伴ったリサーチによる根拠と利用者の価値（観）との統合である」としている（Sackett 2000）。

また、他の研究者による EBP の定義としては Rosen と Proctor のものが挙げられる。Rosen と Proctor は、「EBP とは、ソーシャルワーク実践者は好ましい結果となるように彼らの経験に基づいて支援方法を選択するものとして位置づける。」としている（Rosen, A. & Proctor, E.K. 2002）。しかしながら、この定義について Gambrill は、「あまりにも狭すぎる定義である」として批判している（Gambrill 2003）。つまり、Rosen と Proctor の定義においては、「利用者の価値観や期待の重要性を考慮に入れる点、さらには利用者が参加者として加わる点を無視している。」と指摘している（Gambrill 2003）。

現時点では、EBP の定義として、2000年に Sackett 等が明らかにしている定義が最も多くの文献で位置づけられている。つまり、専門家が行うリサーチに基づく科学的根拠をもとに利用者の価値観を共有しつつ、専門家と利用者が同じ土俵に立ちより効果的な支援方法を検討していくプロセスとして位置づけられているといえよう。

## （2）EBP の方法

EBP の具体的実践方法としては、次の5段階から構成するとされている。（Sackett et al. 2003; Jenson, J.M.&Howard M.O. 2008）

### 1) 実践に必要とされる情報の質問へ転換する

まず、第一段階としては、実践に必要とされる情報を具体的な回答可能な質問にすることである。その際重要な点として、利用者主体の質問でなければならないとしている。Gambrill によると、質問は次の内容を含むべきとしている。①支援やサービスの効果性、②予防、③評価、④記述、⑤予測、⑥被害、⑦費用等の内容を含めた質問を行うべきだとしている。

### 2) 質問に根拠を位置づける

第二段階として、ソーシャルワーカーは利用者から得られた情報に対して適切な根拠を位置づけることが必要であるとしている。その方法として、最も伝統的方法としては文献や雑誌の検索を行うこと、さらには実践のガイドラインに基づく方法も挙げられている。

### 3)・4) 根拠を評価し支援や政策に適応させる

次の段階としては、実践者は、根拠を評価し実践に適用するリサーチデザインや方法論の知識が求められる。ここでは実践者はリサーチ方法を熟知していることや前段階で得られた根拠に基づき支援や施策へと展開していく能力が必要となる。

### 5) 過程を評価する

最終段階として全体の過程を評価することが求められる。

以上、EBP の実践プロセスについて概観した。これは2000年に Sackett 等が提示したものである。

この段階では、まだソーシャルワーク分野における EBP は初期の段階であったと考える。その後、2006年には EBP をソーシャルワークに導入したパイオニアの一人である Gambrill が、Sackett 等が提示したモデルをもとに新たな提言を行っている。それは、EBM における研究者・実践家・スーパーバイザー・管理者・教育者・利用者のそれぞれの立場による実践方法を提示している (Gambrill 2003)。

このような動向からも、今後ソーシャル分野における EBP の実践プロセスは、時代や状況に併い多様に変化・発展すると考えられる。

#### IV. ソーシャルワークにおける EBP の動向

##### (1) ソーシャルワーク教育と EBP

ソーシャルワーク教育における EBP の動向についてみると、前述したようにソーシャルワーク教育に EBP を最も早く導入したのは、アメリカのセントルイスにあるワシントン大学の GWB であった (Thyer, 2003; Howard et al. 2003)。その背景として、1990年代後半から従来のソーシャルワークに対して批判をした Howard やソーシャルワーク実践において実証検証の欠如を指摘した Proctor や Rosen がファカルティーにいたことが考えられる。Howard 等は、科学的根拠に基づきより費用効果があり説明責任を強化できるソーシャルワークの実践を強調している (Howard, 1999)。

また Proctor や Rosen は1993年から1997年までの先行研究レビューを通し、ソーシャルワークにおいて実証検証に基づいた実践がほとんど行われていない点を指摘している (Rosen & Proctor, 1999)。多くのファカルティーが、伝統的ソーシャルワークにおける実証研究の欠如を批判し EBP の重要性を極めて早い段階から強調する状況が、GWB がソーシャルワーク教育において最も早く EBP を導入する結果となったと考えられる。そして、GWB は、2000年には EBP をソーシャルワーク教育に導入することを決定し、カリキュラム改革を行い EBP の教育が開始された。具体的には、学生に EBP の理論を教え、質問の仕方等や実践スキルの支援方法を具現化する形で学生への教育を行い EBP のソーシャルワーク教育へと展開を行っている。また、学内だけではなく、実習教育においても EBP が展開され、また同時に実習先のスーパーバイザーに対して EBP に関する調査も展開されていった。アメリカのソーシャルワーク教育においては、実習は極めて重要視され、CSWE は、学部レベルでは最低400時間また修士レベルでは最低900時間の実習を義務付けている。GWB では、修士課程において1,200時間以上の学外における実習が義務付けられている。よって、実習教育はソーシャルワーク教育において必要不可欠でかつ極めて重要な要素である。実習現場において EBP の位置づけを確認するために、GWB のファカルティーである Edmond 等は調査を実習指導者に対し調査を実施している。180機関の283人の実習指導者に対しアンケート調査を行った

結果、87%の実習指導者がEBPは効果的实践方法であるとしている (Edmond, T., et al. 2006)。

Howard等は、ソーシャルワーク教育におけるEBPの促進に向け12項目の教育的原則を提言している (Howard, M.O. 2007)。その他、2005年以降ソーシャルワーク教育においてEBPの導入を支持する見解が多く見られる。

## (2) ソーシャルワーク実践とEBP

EBPを導入したソーシャルワーク実践は、個人を中心としたアプローチだけではなく、家族ソーシャルワークの分野にも展開している。また1990年代半ば以降、イギリスで展開されたソーシャルサービスの分野におけるEBPの導入を皮切りに、イギリスやアメリカの社会福祉の地域を中心としたミゾあるいはマクロレベルでその方法論が展開されてきている。

イギリスでは、政府が主体的になりEBPの促進を図るためサービス機関が創設されている。具体的には、2001年10月、SCIE (Social Care Institute for Excellence, 以下「SCIE」) という機関が設立された。これは、リサーチの知識を用いてイングランドやウェールズのソーシャルワークやソーシャルサービスの基準を改善するために設立された。すなわち、コミュニティにおけるソーシャルサービスの質の改善を図るために、いわゆるメゾレベルでいち早くEBPの具現化が図られた例である。

また、カナダのトロント大学のRegehr等も、コミュニティにおけるサービスとのEBP実践との連携の強化を提言している (Regehr, C., 2007)。

さらに、ソーシャルワークのミクロレベルでは、個人だけではなく家族をターゲットにしたいいわゆる家族ソーシャルワークにおいてはEBPが導入されている。Cocoranは、『家族に対するエビデンス・ベース・ソーシャルワーク～ライフスパンアプローチ～』を著している。

EBPは、当初医学の分野で発展したアプローチであるため、実践者対クライアントといういわゆる個人を対象とした支援方法であったといえる。しかしながら、ソーシャルワークの分野で取り入れられ発展するに伴い、殊に近年では、メゾあるいはマクロレベルにおいてEBPが展開されるようになってきている。

## (3) 近年のソーシャルワークにおけるEBPの動向

EBPは、元来医学の分野で発生した概念をソーシャルワークの分野に取り入れられたものであった。よって、その創成期においては医学の分野においてもソーシャルワークの分野においてもEBPいわゆる「Evidence-Based Practice」と記述されていた。しかしながら、2003年前後を境にしてEBP (Evidence-Based Practice) とEBM (Evidence-Based Medicine) を区別した表記が目立ってきている。つまり、当初医療において誕生したEBPの概念ではあるが、ソーシャルワークにおけるアプローチをEBPとし、医学分野におけるアプローチをEBMと明確に区別し、ソーシャル



ワークにおける独自の展開を位置づけてきている。

さらに、近年では、2005年には『Evidence-based practice in social work』が、また2006年には『Foundation of Evidence-Based Social Work Practice』が出版されている。また前述したように、2004年以降「Journal of Evidence-Based Social Work」という専門雑誌が定期的に発行されている。

このような動向から鑑みると、EBPは明らかにソーシャルワークに浸透し新たな方法論として明確にその存在を築いているといえよう。

## V. 考 察

### (1) ソーシャルワークの歴史からみた必然性

EBPの歴史的展開を振り返ってみたとき、それは1990年代に生じた従来のソーシャルワークの方法に対する痛烈な批判が引き金になったと考えられる。しかしながら果たしてそれだけであろうか。ソーシャルワークの歴史からそのメッセージを紐解くと次のようなことが明らかになってくる。

まず、ソーシャルワークのパイオニア的存在であるジェームス・アダムスは、「システムティックなデータ収集や情報収集過程は、効果的な個人レベルの支援やコミュニティー計画をもたらす」としている (Addamas, J., 1911)。つまり、実証検証を中心とした科学的根拠に基づいた支援が、個人やコミュニティーレベルにおいて効果的な支援をもたらすとしている。

また、メアリー・リッチモンドは、「例えば医者や法律家など他領域の実践者たちは共通の知識に基づく共通の言語を持っている。…中略…しかしながらソーシャルワーカーはどんな共通言語を持っているのだろうか?」と指摘している。

このように、今から100年近いはるか以前に既にソーシャルワークのパイオニアたちは、ソーシャルワークにおける共通言語、科学性に基づいた共通な技術に必要性を唱えている。

しかしながら、その後ソーシャルワークの技術は、「価値 (value)」「知識 (knowledge)」に重きを置く展開を図り、経験主義的方法に依存していった。即ちソーシャルワークの技術の習得を上司や先輩さらには同僚から習得する方法が中心となっていった。その結果、皮肉にもソーシャルワークのパイオニアたちが求めた、「共通言語」や「実証検証に基づいた科学性」からは相反する方向へと動いていったのではないかと考えられる。

1990年代以降、殊に21世紀に入り、ソーシャルワークの分野では科学的根拠に基づいた支援方法としてEBPが急速に発展してきている。しかしながら、歴史を振り返ってみると、約1世紀前に既に先人が唱えた必要性を満たしつつあるに過ぎないのかもしれない。

### (2) 問題点と今後の課題

「実証検証と実践との連携により改善を図ろうとするEBPの動きは、科学と支援との統合の動き

において新たな方向性を提供している。」とされている。即ち、科学的根拠と実践との連携を図る EBP の動向は、より効果的な支援を生み出しているといえよう。

しかしながらその一方で、現状の EBP に対しては様々な問題点も明らかにされている。

Rubin 等は、全米の社会福祉大学院の修士課程の教員に対して、EBP に対するアンケート調査を実施している。973人の教員に対して EBP についての調査を行った結果、大半の73%にあたる回答者から「EBP は好ましい方法である」という回答が得られている。しかしながら、その一方で「EBP の定義と概念を明確にする必要がある」ということが指摘されている。

また、Jenson は、EBP のアプローチは大変有意義なアプローチであると支持しながらも、次の例を挙げてその問題点を指摘している。「例えば、同じく家庭内暴力を受けた欧米の女性とアラビア系の女性の例を挙げ、文化的背景の相違から支援を外部に求めない場合があることを挙げている。その結果、文化的価値観の相違から生じる支援に対するニーズの差異を同一の方法論で支援することの限界性」を指摘している。

このように、現状のソーシャルワークにおいて EBP は強く支持されているが、その一方で問題点や課題も指摘されている。

### (3) ま と め

筆者が EBP を初めて知ったのは、2006年に出身校であるアメリカのセントルイスにあるワシントン大学 GWB に半年間滞在している際だった。その時既に GWB では修士レベルを中心に活発に EBP を機軸とした教育が展開されていた。

筆者が、学生として GWB に学んだのは1994～5年であった。当時は、今回の文献レビューからもわかるように EBP を中心とした教育はまだ行われていなかった。しかしながら、リサーチ（実証研究）の科目はカリキュラム上必修となっていた。即ち、1年次ではリサーチ（実証研究）の科目が必修で、その次の段階として2年次では Evaluation という科目が必修となっていた。そこでは、当事の日本の社会福祉教育ではほとんど取り入れられていなかった統計ソフトを用いたリサーチスキルの習得が義務化されていた。そして、2年次の Evaluation では、実習先で自らが担当しているプログラムやクライアントに対する支援（介入）を評価することが最終課題であった。つまり、学内で科学的根拠を導き出すリサーチ（実証研究）のスキルを学習し、ソーシャルワークの実習現場で自分が支援（介入）した方法に対しての評価を行うという、科学的根拠の技術と実践の場における支援方法の連携を学習した。その上で、自らが行った支援（介入）の効果測定を行うものであった。即ち、この論文で支持されている科学的根拠に基づいたリサーチ（実証検証）とソーシャルワーク実践との統合を図り、より効果的な支援の実現を行うことをまさに学内と学外との学習の場の連携を通して学習した。当事それがどのような意味を持つものかは十分理解できなかったが、それはまさしく本論文で論じてきた EBP の教育のさきがけだったといえるのではないだろうか。

EBP の発展経過を通して、一つの具体例が思い浮かんだ。今から20年ほど前までは、日本の介護の現場においてシーツ交換をする際、「なぜシーツにしわを寄せてはいけないか」ということは理論的に教えられなかった。私自身の経験から、例えば学生が質問したとしても「従来ここではそうしていたから」と答えられるのが限界であったと思う。しかしながら、その後介護の分野に隣接領域である看護の理論や技術が導入されることにより状況は一変してきている。現在では、介護技術の分野において「なぜシーツにしわを寄せてはいけないか」という疑問に対し、「しわは、褥瘡の引き金になる」よって「褥瘡の予防をするためにしわを作ってはいけない」という科学的根拠に基づいた上での効果的支援方法が明らかにされている。そして、その科学的根拠に基づいた介護技術が若い支援者に教育され浸透している。その結果、利用者はよりよい介護支援を受ける環境が構築されていったと考えられる。

Rosenthal は、「EBP はボトムアップ (bottom-up) アプローチである。」としている。(Rosenthal, R.N. 2004) 即ち、利用者 (クライアント) の視点を重視した上で効果的な支援方法を模索していくものであるとしている。同様に EBP は科学技術を基礎にした力強い支援方法であるといわれている。

本論文で論じてきた EBP は、医学の分野で誕生した概念ではあるが、前述したようにそれはソーシャルワークの分野においてその必要性を求める外圧からの要求に対する必然的な対応であったのであるといえよう。即ち、経験主義に基づきそのソーシャルワークの専門的技術を取得する方法論に対して、時代がその限界性を提示し新たな方法論の発展の要求が迫られたものと考えられる。

EBP がソーシャル分野においてその位置づけを明確にした現在、様々な限界性や問題点は存在するが、多くの実践者や研究者により積極的に改善が図られ今後更なる EBP の発展が展開されていくものと考えられる。

以上、本論文では文献研究を通して海外を中心に近年展開している EBP の動向について探索した。日本においては、まだ EBP の動向は積極的には見られない。しかしながら、利用者に対しより効果的な支援を提供する環境構築を図るためには、今後日本においてもいわゆる科学と実践の融合を図る EBP の導入は極めて重要かつ喫緊な課題であると考えられる。

#### 【文献】

- Addams, J., (1911) *Twenty years at Hull House, with autobiographical notes*, New York, Macmillian
- Bilson, A. eds. (2005) *Evidence-based practice in social work*, Whiting & Birch, Ltd.
- Edmond, T. et al. (2006) Integrating evidence-based practice and social work education, *Journal of Social Work Education*, 32(2), 377-396
- Gambrill, E. (1999) Evidence-Based Practice: An Alternative to Authority-Based practice, *Families in Society*, 80, 341-350
- Gambrill, E. (2003) Evidence-based practice: Implications for knowledge development and use in social

- work, Rosen, A. & Proctor, E.K. eds. *Developing practice guidelines for social work intervention: Issues, methods and research agenda*, Columbia University Press, 37-58
- Gambrill, E. (2006) Evidence-based practice and policy: Choices ahead, *Research on Social Work Practice*, 16, 338-357
- Gray, J.A.M. (2001) *Evidence-based health care: How to make health policy and management decision*, New York Churchill Livingstone
- Howard, M.O., Jenson, J.M. (1999) Clinical Practice Guidelines: Should Social work Develop Them, *Research on Social Work Practice*, 9, 283-301
- Howard, M.O., Jenson, J.M. (1999) Barriers to Development, Utilization, and evaluation of social Work Practice Guidelines: Toward and Action Plan for Social Work, *Research on Social Work Practice*, 9, 347-364
- Howard, M.O., Bricout, J., Edmond, T. et al. (2003) Evidence-Based Practice Guidelines, *Encyclopedia of Social Work Supplement*, NASW, 48-59
- Howard, M.O., Jenson, J.M. (2003) Clinical practice guidelines and evidence-based practice in medicine, psychology, and allied professions, Proctor, E. & Rosen, A. eds. *Developing practice guidelines for social work intervention: Issues, methods and research agenda*, Columbia University Press, 83-107
- Howard, M.O., McMillen, C., Plilio, D.E. (2003) Teaching evidence-based practice: Toward a new paradigm for social work education, *Research on Social Work Practice*, 13, 234-259
- Howard, M.O., Allen-Meares, P., Ruffolo, M.C. (2007) Teaching Evidence-Based Practice: Strategic and Pedagogical Recommendations for School of Social Work, *Research on Social Work Practice*, 17(5), 561-8
- Jenson, J.M. (2005) Connecting Science to Intervention: Advances, Challenges, and the Promise of Evidence-Based Practice, *Social Work Research*, 29, 131-5
- Jenson, J.M. (2007) Evidence-Based Practice and the Reform of Social work Education: A Response to Gambrill and Howard and Allen-Meares, *Research on Social Work Practice*, 17(5), 569-73
- Jenson, J.M., Howard, M.O. (2008) Evidence-Based Practice, *Encyclopedia of Social Work 20<sup>th</sup>*, NASW, 158-65
- Mullen, E.J., Bellamy, J.L., Bledsoe, S.E. et al. (2007) Teaching Evidence-Based Practice, *Research on Social Work Practice*, 17(5), 574-82
- Paglicci, R. (2007) To be or not to be: Will Evidence-based Practice Be Used by Clinicians?, *Research on Social Work Practice*, 17, 427-8
- Regehr, C., Stern, S., Shlonsky, A. (2007) Operationalizing Evidence-Based Practice: The Development of an Institute for Evidence-Based Social Work, *Research on Social Work Practice*, 17(3), 408-16
- Rosen, A., Proctor, E.E., Morrow-Howell, N. et al. (1995) Rationales for practice decisions: Variations in knowledge use by decision task and social work service, *Research on Social Work Practice*, 5(4), 501-23
- Rosen, A., Proctor, E.E., Staut, M. (1999) Social work research and quest for effective practice, *Social Work Research*, 23, 4-14
- Rosenthal, R.N. (2004) Overview of Evidence-Based Practice, Roberts, A.R. & Yeager, K.R. eds., *Evidence-based practice manual*, Oxford University Press, 20-9
- Rubin, A., Parrish, D. (2007) Views of Evidence-Based Practice among Faculty in Master of Social Work Program: A national survey, *Research on Social Work*, 17(1), 110-22
- Szatmari, P. (1999) Evidence-based child psychiatry and the two solitudes, *Evidence-Based Mental Health*, 2, 6-7
- Thyer, B.A. (2003) Empirically Based Interventions, *Encyclopedia of Social Work 19<sup>th</sup> Supplement*, 21-9
- Woody, J.D., D'Souza, H.J., Dartman, R. (2006) Do Master's in Social Work Programs Teach Empirically Supported Interventions? A Survey of Deans and Directors, *Research on Social Work*, 16(5), 469-79